市川昔がたり⑥　【安政3年にも津波があった】

多賀台　奈　良　孝次郎

1．〈地震は昼（ひる）時に発生〉

安政3年（1856）陰暦7月23日の昼時に、八戸周辺に大きな地震が発生し、甚大な被害をもたらした。八戸では町内の御殿通り、藩学校の土塀や火見櫓（ひのみやぐら）が倒壊、町中でも家屋の倒壊がいたる所でおこり、目もあてられぬ惨状だった。その後強い余震が続き、人々はムシロや戸板などを寺社の境内（けいだい）や路上に敷き、何日も過ごした。

2．〈1時間後に津波がやってきた〉

この時の津波は急激な大波ではなく、ひたひたと水が押し寄せ、水位が上がっていった。人々は逃げる余裕はあったが、その後も水は増え続けた。海辺の造船所にあった千五百石積の大船が、左比代まで押し上げられた。数十戸の家屋も流出した。津波は馬淵川を逆流したので、石堂や河原木の人々は争って高館の岡の上まで逃げた。

3．〈市川辺での惨状は〉

市川（当時は下市川と記録された）辺でも、地震によって多数の家屋や納屋がつぶれた。その後津波はゆっくりときたので、多くの人は難をまぬがれた。それでも昼時に海辺で遊んでいた子ども3名が流されて死んだ。ほかに納屋とともに網や漁具、魚油や鰯粕・塩などが多数流された。

4．〈ふたつの地震・津波を比較すると〉

安政3年（1856）と明治29年（1896）のふたつの津波を比較すると、かなり違うことに気がつく。安政3年の場合、地震は大きかった（多分震度6か）が津波は小規模だった。それに比べ明治29年の場合は震度は低かったが大きな津波が発生し、被害も大きかった。津波発生のメカニズムはよくわからないが、低い震度の地震でも大きな津波をもたらすことに心すべきだろう。　**「多志南美草（たしなみぐさ）」・「百石町誌（下）」** などを参照

寺社巡り③　「正一位長者久保稲荷大明神」と社主の吉田氏①

桔梗野7区　**吉田　幹夫**

その1.　初代当主、吉田源九郎の代（明治41年）まで

先祖は**悪虫**（現在は長苗代二丁目・国道104号線沿いの稲荷神社付近）の出で、総本家は屋号を〈**かそし**〉と言い、今は八食センター近くに移転しています。明治維新の前あたりにここ**長者久保**（通称**中ノ沢**）の住人となり、本来は「上村姓」であるが、当時の名主とか庄屋と言われた浜市川の**「やまじょう」**（**八**の下に**上**という字）さんから「吉田」の姓を貰ったと言われております。4代目当主で社主の吉田一雄が、**「やまじゅういち」**（◯の中に**八**・その下に**±**という字）という屋号を示す焼印を所有しております。 戦前は当家の激動期で、同時期に3名が死亡（3代目当主は28歳で、その弟と2代目当主も死亡）しており、当時4代当主が幼少のために後見人を立て、その後戦争を経て現在に至っております。

さて、当神社の件ですが、初代源九郎が四国巡礼・伏見稲荷大社を参拝した当時は、巡礼・参拝は正に命懸けであり、家を出る時は新調の着物で出発しても、帰郷の頃はボロボロになったと言われております。2代目丑松の参拝の折も同様だったようです。　（続きは次号に掲載致します。　）

※吉田幹夫が4代当主・吉田一雄より資料を借用・聞き取りをして文章化。それを鈴木亮がパソコンで清書しました。

［追悼］　当会の会員・**根岸國男**氏が去る5月7日に逝去されました。つつしんで哀悼の意を表します。（市川を調べる会）